

## 論文要旨

氏名 \_\_\_\_\_ 伊東 裕起 \_\_\_\_\_

論文題目（外国語の場合は、和訳を併記すること。）

\_\_\_\_\_ The Double War: Yeats's Philosophy and Sense of National Identity \_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_ in Evolution, from *John Sherman* through "Meditations in Time of Civil War" \_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_ (二重の戦：『ジョン・シャーマン』から「内戦時の瞑想」までの \_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_ イェイツの哲学およびナショナル・アイデンティティの進化について) \_\_\_\_\_

論文要旨（別様に記載すること）

- (注) 1. 論文要旨は、A4版とする。
2. 和文の場合は、4000字から8000字程度、外国語の場合は、2000語から4000語程度とする。
3. 「論文要旨」は、フロッピーディスク（1枚）を併せて提出すること。  
(氏名及びソフト名を記入したラベルを張付すること。)

## 論文要旨別紙

伊東裕起

序論に述べるように、アイルランドの作家 William Butler Yeats はアイルランド独立運動に深く関わり、アイルランドの蜂起や独立戦争、そして内戦を見つめ続けた作家である。彼はこの世界を闘争の場とみなし、二つの相反するものの戦いの中から創造的なものは生まれると考える、弁証法的な闘争の詩学をもっていた。しかし、彼の闘争の詩学は後期作品に顕著に見られる、という見方が従来一般的であった。初期の Yeats はアイルランドの妖精民話や神話を題材にした作品を多く発表していたせいか、従来の研究では彼の初期作品には闘争の詩学が希薄であり、彼自身も政治的にナイーブだったと看做される傾向にあった。しかし、彼の作品テキストを読み解くと、彼の闘争の詩学——”the double war”と彼が呼ぶ、社会的な外面の戦い *outer-conflict* と哲学的な内面の戦い *inner-conflict* の詩学は彼の初期作品から見られる。本博論では、Yeats 作品の中でも最も等閑視されている作品の一つである *John Sherman* という作品を取り上げ、それが彼の後期の作品、“*The Meditations in Time of Civil War*” などにも通じる”the double war”の詩学の萌芽となっていることを立証する。また、アイルランド独立期の激動の時代の中で、“the double war”の中で、どのように自らのナショナル・アイデンティティを確立していったのかを論じる。

第 I 章では、具体的な作品の分析に入る前に、従来初期の Yeats 像の修正を目指す。従来の批評では初期の Yeats はケルトの妖精を夢見るあまりにアイルランドの現実の政治から目を背けていた逃避的な人物であった、との評価が一般的であった。しかし、実際はそうではなく、彼はアイルランドの文化的独立を目指していた文学的活動家であったこと、そして *Anglo-Irish* としての生まれゆえに”the double war”という社会的・精神的な二重の闘争の詩学を身につけざるを得なかったこと、そして彼の描くケルトの妖精もアイルランド民族主義者としての巧妙な戦略でもあったこと、そしてその妖精などのケルトの中に闘争の詩学が見られることなどを論じる。

ポストコロニアル的な視点からは、当時のアイルランドがいかに差別的な言説に覆われていたか、その言説がいかにアイルランドの自治・独立を妨げていたか、そしてその言説を打ち破るためのアイルランド文化・ケルト文芸復興がいかに重要なことであったかを論じる。Yeats も自伝に記しているように、当時の人種理論により、アイルランド人およびケルト民族は人種的に理性的ではなく、国を治める能力がないとされていたのである。アイルランド人およびケルト民族の価値を証明し、アイルランド自治を認めさせるためにも、ケルト文芸復興運動は非常に重要なものだったのである。そのように、初期 Yeats のケルト文化への傾倒は従来述べられていたようなアイルランドの政治の現実からの逃避ではなく、むしろ政治的なものであったということを論じる。

また、英国とは違うアイルランドの文学を英語で創作しなければいけなかった Yeats の葛藤について論じる。Yeats は Anglo-Irish として、ゲール語ではなく英語でのみ作品を著した。また、ケルトの吟遊詩人のように詩の韻律の力を信じながらも英語でしか作品が書けなかった彼は、英国詩の伝統的な詩形にこだわり、その韻律によってケルトの詩人のような魔術的な力を扱えると信じようとした。しかしながら、彼が告白しているように、彼にとって英語で物を考え、作品を創作することは、常に相反する感情に苛まれることを意味した。宗主国の言語と文学形式で、宗主国の文学とは異なる植民地の文化を表現することは困難を極める作業であった。しかし、その彼の内面の葛藤、“the double war” の一つ、inner-conflict が結果として、アイルランドの新しい文学表現を生み出すことになったということを論じる。

第II章では、初期 Yeats が偽名で執筆し、多くの批評家からも等閑視されている彼の最初期の中編小説 *John Sherman* を読み解く。それにより、彼が後期の作品で展開する闘争の詩学の萌芽——対立する正反対の人物造型について論じる。またその人物造型のうちに含まれる彼の内在化された宗主国側の言説の問題点、そしてそれに彼自身気づき、自らのナショナル・アイデンティティを再考する Yeats について論じる。

*John Sherman* における登場人物が Yeats の対立の詩学の萌芽であるという観点から考察を行う。Yeats は後に、特に後期の作品において相反する性格の象徴的な人物を登場させ、彼の思想を語るようになるが、この小説における John Sherman と William Howard はその萌芽である、という見方である。このような観点からの考察自体はそう新しいものではなく、Richard Ellmann(1949)などがあった。しかしながら、Ellmann の研究も含め自伝的要素の強さから先行研究の大部分は伝記研究の一部分などが多く、この観点からのまとまった研究は少ない。本節ではその John Sherman と William Howard を変化と不変という観点から考察しなおす作業を行った。

また、本作品における人物造型の問題点と、それについての Yeats 自身の内省を考察し、彼のナショナル・アイデンティティを考察する。本作品の登場人物はアイルランド的な人物として造型されているが、それはアイルランド人のステレオタイプでもあり、宗主国側から見た偏見を内包している。Yeats は作品発表後にそれに気づき、本作品を自らの作品リストから外した。彼は本作品の反省を通して自己のアイデンティティについて考えを深めた。彼は自分と Anglo-Irish の地主でユニオニスト詩人 William Allingham を比較し、自らのあり方と作品 *John Sherman* を省みる。Yeats は *John Sherman* の執筆と反省を通し Anglo-Irish であることの長所と短所を見つめ直した、ということ論証する。

第III章では、Yeats が Lady Gregory を通した Anglo-Irish の貴族的な価値、アイルランドの英雄 Cuchulain、そして Nietzsche の思想との出会いと受容を論じる。Yeats は Nietzsche の“*Herrenmoral*” (主人道徳) を “noble morality” と訳した William Hausmann 訳 A

*Genealogy of Morals* によって主人道徳を Anglo-Irish の階級的な貴族における価値と結びつけ、その没落を英雄的な”will to be tragic”として積極的に受容するという哲学を作り出すことによって、アイルランド独立と共に没落していく Anglo-Irish の宿命と向かい合った。また、”will to be tragic”は此岸を否定するための “passive suffering”ではなく民族・国家のための殉教を強要する「新しい偶像」となってはいけない、という観点から Patrick Pearse 的な Cuchulain 像および Easter Rising に Yeats が挑戦したことを指摘し、それに対抗する英雄像としての Robert Gregory 像および第一次大戦における Anglo-Irish についても論じる。

第IV章では、アイルランド独立戦争、Yeats が内戦の戦火の中でアイルランド西部の古い塔に籠もり、自らの内面的葛藤を見つめ、”the double war”として思索を深め、書いた作品”The Meditations in Time of Civil War”、特に Anglo-Irish の過去と未来を描いた ”Ancestral Houses”と “My Descendants”について論じる。暴力によってその貴族的な価値を築いた Anglo-Irish が現在の暴力によって没落してゆくさまを積極的に”will to be tragic”として受け入れることによって直面する Anglo-Irish の没落を高貴なる悲劇として描き、その”the double war”の中でなおその存在を肯定したことを論じる。

結論として、以上の議論により、Yeats は前期・後期を通して”the double war”の哲学を持ち続けたこと、そしてそれはアイルランドの社会的な conflict の深化と共に発展していき、また同時に彼の Anglo-Irish のナショナル・アイデンティティも深化していったということが証明された。また、その”the double war”と Nietzsche の悲劇の思想との関連も証明された。今後の研究の課題として、Yeats の闘争の詩学に影響を与えたと思われる哲学者（例：Jacob Boehme など）の思想の受容の考察を行うことや、同時代に活動した他のアイルランド作家で複雑な背景を持つ作家（例：Alice Milligan など）との比較などを行うことなどが挙げられるだろう。